

# 中学生時代の 大宅 壮一

—— 時事新報社発行の雑誌『少年』への投稿活動と学業成績 ——

阪 本 博 志

## 一 本稿の目的

私という人間をつくる上にもっとも大きな影響力をもったものは、やはり茨木中学だったと思っている。影響をうけやすい年齢でもあったが、いい先生がそろっていたからだ<sup>1</sup>。

大宅 壮一（一九〇〇—一九七〇）の母校・大阪府立茨木高等学校（旧制・茨木中学校）の同窓会組織・久敬会<sup>きゅうけいかい</sup>は、一九五五年の創立六〇周年のおり、大宅と三学年上の卒業生である川端康成（一九八九—一九七二）のふたりに講演を依頼した。このときには両者とも講演はかなわなかった



（図1）茨木高校創立七〇周年を記念して開かれた講演会での大宅 壮一（茨木高校久敬会所蔵）

（創立七〇周年のときには、一九六五年一〇月三日にふたりの講演が実現している。図1は大宅の講演のものである。口絵の写真はそのおりに撮影されたものである）。川端からは手紙が、大宅からはメッセージが寄せられた。そのメッセージ

ジが、冒頭のものである。

また大宅は、ライフワークとして取り組みながらも頓挫した未完の作品『炎は流れる——明治と昭和の谷間』（『サンケイ新聞』一九六三年一月一日〜一九六四年一〇月三日連載）の単行本第一巻（文芸春秋新社、一九六四年）の「まえがき」で次のように書いている。

わたくしの主たるねらいは、わたくしにとつてもつとも身近な「過去」、わたくしの人間形成がなされた時代、すなわち「大正時代」である。この時代は、偉大なる明治」と、「現代」ということで今もつづいている昭和との谷間にあつて、もつとも混乱した時代、見る人によつては軽蔑されている時代である。しかし、わたくしにとつては、いちばん懐かしい時代である。

「大正人」といつても、大正期に育つた人と、大正期に生れた人とは、区別しなければならぬ。明治に生れ、大正に育つて世に出た人々で、戦争の嵐をくぐりぬけて生きのこっているものは、今ではほとんど還暦をすぎ、肉体的もしくは精神的に、社会から引退し、退場する時期が近づいているともいえる。

そういう存在の一人として、大正期のことを書きのこ

す責任があるのではないかとわたくしは考えた。還暦をすぎたらこの仕事にとりかかろうと思つて、ぼつぼつと資料をあつめ出してから、かれこれ二十年になる？。

大宅は大正時代（一九一二年〜一九二六年）を「わたくしの人間形成がなされた時代」とし、それを記録する責任感を表明している。大宅が茨木中学校に入學し、米騒動を扇動する演説をしたかどで退學となる、在學期間（一九一五「大正四」年四月〜一九一八「大正七」年一月）は、この前半に重なる。したがつて、大宅が茨木中学校（時代）を「私という人間をつくる上にもつとも大きな影響力をもつた」と述べていることは、一九五〇年代半ばから一九六〇年代にかけて「マスコミの王様」とまで言われた大宅を把握する上で重要である。

この中学生時代の大宅を知ることのできる資料は、『茨木中学校生徒日誌』（『青春日記』上下として一九七九年に中公文庫に収録。以下『日記』）と『大宅壯一選集一二』（筑摩書房、一九六〇年）に再録されている自伝的文章である。全校生徒が書き週に一回は担任に提出することが義務づけられた。前者は、大宅自身が同時代につけた記録である。大宅の代表的な評伝である大隈秀夫『裸の大宅壯一——マ

スコミ帝王』（三省堂、一九九六年）や猪瀬直樹『マガジン青春譜——川端康成と大宅壮一』（文春文庫、二〇〇四年）は、これらに依拠している。またこの『日記』に関する主要な論考としては、小田切進「続・近代日本の日記——八飯中の礫——大宅壮一『青春日記』（『群像』一九八七年三月号）や有馬学「大宅壮一日記」（山口輝臣編『日記に読む近代日本 三 大正』吉川弘文館、二〇一二年）がある。

このほか中学生時代の大宅の手になる著作としては、『大宅壮一全集』第三〇巻の巻末付近に再録されている「作文」「投稿より」がある。

中学生時代の大宅に少年雑誌への投稿に熱中した時期があることは、『日記』の随所からも読み取ることができ、上記の先行する著作も、必ず言及している。しかしながらこれらでは『日記』に記録された特定の投稿作品を紹介することにとどまっており、投稿活動の全体像を明らかにしたり、あるいは投稿作品群と『日記』の記述を往復した読みを『日記』に対しておこなってはいなかった。

この大宅の投稿活動の開始を、『大宅壮一全集』別巻の『大宅壮一年譜』や大隈の上記著書巻末の年譜は、一九二一年としている<sup>4</sup>。これは、大宅自身が次のように述べていることによる。「小学校の尋常科から高等科に進むころ

私は、少年雑誌に投書することを覚えた。当時時事新報社から出ていた『少年』という雑誌に、初めて作文を投稿して見事なメダルをもらったのが病みつきで、実業之日本社の『日本少年』、講談社の『少年倶楽部』などに、作文、和歌、俳句、その他何でも投稿した<sup>5</sup>。

ここで大宅が時事新報社発行の『少年』でメダルをもらったことを印象深く記述していることに注意したい。『日記』は、一九一五年七月二十六日までのものを二七日に盗まれていることから、七月二七日から始まっている。八月二日の『日記』には、「雑誌へ出す作文や歌を書いた。勉強の害になるから止めようと思うが僕にはどうしても思い切れない。文芸をやっているとなんかに父母にすすめられても果ては叱られる迄床へ入らない<sup>6</sup>」とある。この時点ですでに大宅は少年雑誌への投稿に熱中しており、『少年』以外の誌名も、『日記』のあちこちに見ることができるとある。

その大宅が投稿をやめた時期も、『日記』から特定できる。一九一七年一月一七日の『日記』のなかで『少年』二月号を手にしたくだりに次のように綴っている。

その三分の二は投書家の作にて埋めらるるといふ増刊の懸賞文募集これあり、毎号読者通信にてもてはやさる

る我は、勉強に害ありと知りつつもう一回一回と続け居りしが愈々此の度は十分の傑作を得、最後の奮闘を鮮かにして少年文壇を退く覚悟に候<sup>7</sup>。

実際『少年』一九一七年二月号（第一六一号）には、折り返みのかたちで「三月五日発行『少年』臨時増刊 初陣予告」の告知が掲載されている。これは同誌初の臨時増刊号であった。募集は、「甲の部」「乙の部」「丙の部」に分かれている。「甲の部」の課題は、「初陣」（字数八百字以内）、「海外の友に与うる書」（同千二百字以内）、「幼い時分に聞いたお伽噺」（同千字以内）、「お国自慢」（同千二百字以内）、である。

大宅はこれらのうち「初陣」「海外の友に与うる書」のふたつの題で作文を書き、担任の多門力蔵に添削してもらったうえで清書した原稿を、一月三〇日に発送している。

この両者とも掲載に至っている。大宅は三月三日に「初陣」（図2）を手に行している。それぞれの選評が筆記されたあと、この日の『日記』は次のように終わっている。

ああ懐しき少年雑誌の投書もこれにて終りしなり。何となく慕わしく惜しき心地す。これを始めてより二年

間、此の間の刻苦と愉快は生涯我が記憶より去らざるべし<sup>10</sup>。



（図2）『少年』一九一七年三月五日増刊「初陣」（大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵）

以上、大宅が最後の投稿先として『少年』を選んだことや、のちにも『少年』への投稿を印象深く記憶していることから、大宅のこの雑誌への投稿にはとくに思いいれがあったものと推測できる。しかしながら、上記「投稿より」には、一九一六年九月号（第一五六号）に掲載された「古き家」という作品しか収録されていない。そのため、最も重要と判断される『少年』における大宅の投稿活動を、『日

記』と照らし合わせながら明らかにすることが、本稿の目的である。その上で彼の学業成績との関連性も検証する。

『少年』の誌面調査の方法としては、一九一二年一月号（第一〇〇号）から一九一七年六月号（第一六六号）までの読者投稿欄の悉皆調査をおこなった。上記臨時増刊号（第一六三号）より後の号については、臨時増刊号で大宅の投稿が終わっていることを確認したものである。投稿欄の構成は、前半に作文等の文芸作品が、後半に一般の投書が掲載されている。たとえば調査を始めた号である一九一二年一月号は、作文・和歌・俳句といった文芸作品の投稿欄が二八頁、一般の投書欄が六頁で構成されていた。一九一七年六月号は文芸作品が一〇頁、一般投書が一二頁で構成されていた。作文等は、お題が二号前の誌面に告知されそれに沿って応募する形式となっている。

## 二 大宅壮一の『少年』への投稿活動

本節では、大宅の投書をその掲載頻度から三つに時期区分して紹介したい。

### 二一 一九一四年—一九一五年

この時期は『少年』への大宅の投稿の掲載が始まった時

期である。

大宅の名を最初に確認できるのは、一九一四年二月号（第一三五号）の「懸賞作文普通課題第一三三回 私の知って居る軍人」において、「優等三十篇」として一六名の作文が掲載されたあとに、「此他掲載漏れ優等者左の如し」として一五名の名が記載されているところの冒頭である<sup>11</sup>。一月号でのこのお題の告知には、「当選二名 銀時計と銀製少年賞牌」「優等三十名 銀製少年賞牌」とある<sup>12</sup>ことから、大宅が『少年』に「初めて作文を投稿して見事なメダルをもらった」のはこの号だと考えられる。

一九一五年八月号（第一四三号）には、「懸賞和歌 浜」に「秀逸」として大宅の作品が掲載されている。「秀逸」とは、「入賞五人（少年名誉賞牌受賞）」の次にあたる。

つくぐと雲の行方を眺めけり浜草の花白き夕ぐれ<sup>13</sup>

一二月号（第一四七号）の「読者通信」には、次のような大宅の投書が掲載されている。数こそ少ないものの、大宅は一般の投書もしていたようである。

今日一人の立派な紳士が道々稲穂をちぎって獅噛んだ

り、揉潰したりして行くのを見たあゝこれが一等国の紳士か。一粒の米も農夫が辛苦の結晶だ。それを己の慰めにするのは道徳上重い罪悪である。今や旅行の季節が来た。諸君は真似にもかゝる事をせられないように僕は只管希望する<sup>14</sup>。

## 二一二 一九一六年

この一九一六年には大宅の多くの作品が掲載にいたっている。

一月号(第一四八号)では、「懸賞作文普通課題第一四六回発表 龍」の「選外佳作者」一五名のなかに大宅の名がある。

同号の「懸賞和歌 眉」では、「秀逸」の最初に大宅の作品が掲載されている。「秀逸」は、先と同様「入賞(少年賞牌受賞)」に次ぐものである。

木缺みを後にさして飛行機を仰げる祖父の眉動きけり

「懸賞俳句 小松」でも「秀逸」として次の俳句が掲載されている。

初雪やいれ忘れたる小松にも

同じ号の「読者通信」では大宅の「記者先生我大阪で『少年』の愛読者大会を開いてください」という投書が掲載されている<sup>15</sup>。

二月号(第一四九号)では、「懸賞作文普通課題第一四七回発表 賑い」において「優等(少年賞牌受賞)」のところに大宅の作品が掲載されている。「優等」は、「一等(少年賞牌並に銀側懷中時計)」の次に位置する。

欧州は砲声、喊声に騒ぎ、支那は袁皇帝問題に動揺めいて、  
今日、我国は叡聖なる 天皇陛下が天津日嗣の宝祚を  
踐まれ、全国旗と提灯で埋って、日々、万歳の声、鼓の音、  
鐘の響で天地を揺がすばかりの大賑いである。ああ偉大なる  
此賑い！実に此賑いはお儀式的ではない、交際的ではない、  
勿論錢儲主義や憂悶を逃れる為ではない、実に心底から湧き上る  
喜びの発散に他ならぬのである。ああ貴い此賑い！他国が望むべからざるは  
此賑いである。併し我等は唯歡樂に酔うてはならない。此賑い  
によって一入光を増した我国体を益々磨いて行くと共に、  
商工業を發達せしめて、冬野よりも淋しい我国の懷

中を此様に賑やかにし以て此賑いの花に玉の実を結びし  
めねばならぬ。(自作証明者父大宅八雄)

評 賑いの花に玉の実を結ばせるは第二の国民たる

少年青年諸君の務めであることを忘れてはな  
りませぬ<sup>16</sup>

三月号(第一五〇号)では、「懸賞俳句 竹」において  
「佳作」に大宅の作品が掲載されている。「佳作」の位置づ  
けも、「入賞(少年賞牌受賞)」の次にあたる。

初雪や竹馬で行く豆腐買<sup>17</sup>

四月号(第一五一号)では、「懸賞俳句 柳」において  
「秀逸」に大宅の作品が掲載されている。

白布をかけし柳や春の風<sup>18</sup>

六月号(第一五三号)では「懸賞作文普通課題第一五一  
回発表 校庭」において「優等十篇(少年賞牌受賞)」に大  
宅の作品が掲載されている。

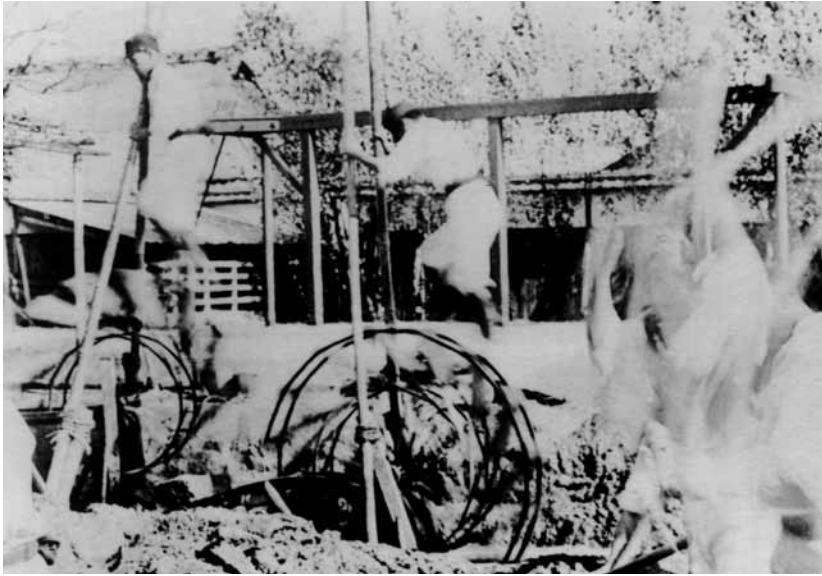
校庭!というと親のように懐しい。

巍然たる東宮臨啓碑、翠緑滴る養気園、清水溢るゝ水泳  
池、広大なる運動場、此等は皆、我等生徒の作業によつ  
て成つたのだ、流汗の結晶なのだ。されば同じく碑を拝  
すにも、ベンチに腰をおろすにも、水に入るにも、体操  
するにも、その受くる刺激に於て、他と多大の差が生ず  
るのである。これ我校の生徒が、よく厳しい軍隊教育に  
耐え、模範校と称せられるゝに至つた大原因だ。実に此  
の校庭こそ、我等五百の生徒を慰むる慈母であり、剛毅  
の精神を伝え、墮落を戒むる嚴父である。

工夫養成所!それは府下の学生間に於ける我校の綽名  
だ。併しその裏面には、かゝる偉大なる功績あることを、  
諸君は記憶して戴きたい。(自作証明者父大宅八雄)

評 軍隊的嚴肅な意気が、文の上にも現われて、読  
む者に膝を正させます。一言の無駄もない、し  
かもギス／＼しない処が感服です<sup>19</sup>。

「水泳池」(プール)が「我等生徒の作業によつて成つた」  
というのは、一九一五年九月六日に全校生徒の勤勞奉仕に  
よる工事が始まり一九一六年二月一日に完成した御大典  
記念水泳場のことである。体操の教師をしていた杉本<sup>20</sup>伝



(図3) 水車を踏む中学一年生当時の大宅壮一  
(右側の水車、茨木高校久敬会所蔵)

は「当時一年生の大宅壮一君（評論家）は、体が大きく力持ちだったので、もっぱら水車を踏んでました。四年生だった川端康成君（作家）も、弱い体をおして、一時限十三往復の土運びをやりましたよ」と回想している（図3。口絵の四枚目の写真も参照）<sup>20</sup>。

七月号（第一五四号）では「懸賞和歌 牡丹」において「秀逸」に大宅の作品が掲載されている。

きざはしをなかばのぼりて振りかえる振袖の子よ長谷の牡丹よ

同号の「少年笑句 嘘らしい」において「佳作」に大宅の作品が掲載されている。「佳作」の位置づけは「二等（受賞）」「秀逸三十名（受賞）」に次ぐものである。なおこの号に作品が掲載されたことは、『日記』には書かれていない。

凸坊のハイ出来ましたは嘘らしい<sup>21</sup>

八月号（第一五五号）では「懸賞作文普通課題第一五三 回発表 戦話」において「優等十篇（少年賞牌受賞）」に大宅の作品が掲載されている。大宅は七月一五日に掲載誌を



手にし、「少年」の賞牌はこれにて四個に候。もう一個を得れば名譽大賞牌と引換えらるべしと思えば嬉しく候」<sup>22</sup>と綴っている。

戦話！という語が聴覚に触れると五体をめぐる若い血潮が一時に沸きかえる、雙腕の高鳴を禁じ得ない、僕は戦話は何よりも好きだ。智謀縦横敵を地に塗みれしむる名將の戦略に快哉を叫び、味方の運命非なるを知りて敵に裏切る卑怯の輩に嘲罵を浴びせ、主君に代りて悲壯の最後を遂ぐる忠臣の行為に感涙を催し、君に刃向う逆臣の振舞に覚えず拳を固むるは、これ人情の自然である。而して此等幾多の戦士の中には、一敗忽ち意氣沮喪して再び起つ能わざる者あれば、七転八起遂に最後の勝利を得る者がある。

思えば戦話は、正義を教え、武士道を伝え、加えて不撓不屈万難を排して勇壯邁進する男性的の気性を養成するものである。(自作証明者父大宅八雄)

評 戦話を聴く時の人の感情がよく写せました。<sup>23</sup>

九月号(第一五六号)では「懸賞作文普通課題第一五四回 古き家」において「優等十篇(少年賞牌受賞)」の三人

目に大宅の作品が掲載されている。大宅は掲載後『日記』に全文を写している。<sup>24</sup> この賞牌は八月一九日に届き、これで五つになった賞牌を名譽大賞牌と交換してもらうために大宅はこれらを時事新報社に発送している。<sup>25</sup>

好田さんへ使に行けと命ぜられて家を出た五月雨がシト／＼降って家々は静かに眠っているように見える。その中で唯一の瓦屋根——重い戸を開けて「御免！」という声は陰鬱な空気を伝って奥へ流れ込んで行く……返事が無い。綺麗に磨かれて黒々と光っている格子戸から中を覗くと、煤けた襖の上に槍や鳶口が袋に入れて掛けてある。敷居や柱等は大変な虫孔で碎けはすまいかと危まれる——此の家——こんな古びた家、これが徳川三百年の発祥の蹟だと誰が思おう、即ち大阪冬の陣の際、真田郎党は追われた家康が此の家にかくまわれて危く難を逃れたのであると云う。「何か用事か。う。」奥から老人の声が緩やかにもれた。(自作証明者父大宅八雄)

評 五月雨やら袋入れの槍、すべてに古い家の気分が満ちて居ります。奥の老人の一声、古い気分が引締めて更に嫺々たる。余韻を聴きます

同号では「懸賞和歌 木蔭」の「秀逸」にも大宅の作品が掲載されている。

緑蔭に地図敷いて伏し眼の上に手拭乗せてまどろみにけり<sup>26</sup>

九月四日、時事新報社から名誉大賞牌が届いた。そのときの感慨を大宅は「ああ僕が一ヶ年間の努力の賜物、汗の結晶、値段は高くあるまいがそれに伴う名誉、腕の発達は「得難い」<sup>27</sup>と綴っている。ここから、大宅が『少年』の名誉大賞牌を本格的に狙ったのはこの約一年間であったことが窺われる。

一月号（第一五八号）では「お伽千字文佳作者」の四名中最初に「思う儘著 大宅壮一」の記載がある。大宅はこの作品の全文を九月二〇日の『日記』に綴っている<sup>28</sup>。

## 二一三 一九一七年

この一九一七年は大宅の投稿活動が終わる年である。

二月号（第一六一号）の「読者通信」には、島根県の読者からの次のような投書が掲載されている。最初に大宅が挙がっていることから、大宅の名は読者間に知られてい

たと推察できる。

我が『少年』の投書家の中で最も奮わぬは我県だ。松原白汀、松岡紅夢、星野いづみの諸兄起てよ。何の大宅壮一、大田繁則、佃重雄の諸兄に恐るゝ事あらんや。躊躇し給うな<sup>29</sup>。

そして臨時増刊号（一六三号）には、先述のようにふたつの作品が掲載されている。まず「海外の友に与うる書」は、「選外佳作」の一七人中五人目に作品が掲載されている。「選外佳作」は、「二等（腕巻銀時計受賞）」「二等（万年筆受賞）」「三等（少年書籍受賞）」に次ぐものである（三等は第一席から第十席までに序列化されている）。

御大典も終り、立太子式も了て、和氣靄々たる大正六年を迎えた。君も嘸祖国が恋しいだろう。惜しい袂を千里に分つてから二度目の春——あの天神森の芝生には又土筆が出て来たよ。卒業式を終えて、賞品を抱えて喜びに満ちた二人が、いそぐと家路に急ぐ途すがら、あの森で休んだね。そして君が二三日の中に立つかも知れぬと云った時、僕は急に悲しくなった、君の眼にも涙が浮ん

だ。丁度その時、僕が新しいナイフを持っていたので、森中で一番真直な丈夫そうな若木の樫を見立て、互に交代で自分の名を刻りつけた、其の前で二人は未来の成功を誓って別れたね。それから僕は家へ帰ると、急に君と一緒に行きたくなくなって、母にねだり、君のお父さんにも願った、しかし許されなかった。その後、せめて上の学校へなりともと親類の叔父さんに泣きついて、今では毎日一里の道を町の中学校へ通っている。併し遅く入ったのでまだ二年生だ。君はもう余程英語が上手になつたろ、うね。僕も先日やつと第二リーダを終えたよ。此の頃僕は通学の途中いつもあの森で休んで遠く想を君の上に馳せている。君、筆の序があつたなら、其方の様子を精しく知らしてくれ給え。

話は大きく変るが、君も知っている通り、近年我国は学芸の進歩著しく、商工業の面目も大いに改つて輸出超過の盛況で、国威は南洋の島々に及び、満蒙も亦勢力範囲に入った、陸に、海に、無限の富を秘めた大宝庫の鍵は得られた。大和民族大発展、大飛躍の足場はもう完全に出来上つた。我国の将来——想いやるだに胸が躍つてやまない。かゝる国運に際し、遠く国を離れている君は一層その喜びが深いだろう。併し君、輸出超過も米国に較

べたらまだいうに足らない。又欧州の大戦乱が終つたなら、世界の形勢は益々複雑となり、平和の戦は激甚を極めるだろう。そうしてその舞台に、我等は此国を負うて立つのだ。多望多憂とは実に我国の将来と我等の前途とをいうのだろう。此の際此の時、君は我が大和民族の先鋒となつて大いに奮励努力してくれ給え。僕は君が必ず他国の少年に引けを取らないと信じている。君よ、世界の人種が集つているという加州にある君よ、日本男児の腕の程を彼等が脳裡深く沁ませて、排日の根を絶つのは君の責務だ。僕も出来る限り邦家へ貢献しつゝ、遙かに君の奮闘を祈り、君が故郷の空に錦を飾られる日をば待つて居る。君あの天神森の樫の木はだんく、太つて来るよ。(自作証明者父大宅八雄)

評 言う事が大きいですね、結果の一句、何等の好文字ぞ書き方甲の上。

もうひとつの「初陣」は、「三等（少年書籍受賞）」一〇人中二人目に掲載されている。「三等」は、「二等（腕巻銀時計受賞）」「二等（万年筆受賞）」に次ぎ、そのあとには「選外佳作」一五名の作品が掲載されている。

白馬銀鞍、緋緘の鎧の袖を薫風に吹かす初陣の若武者——そのような勇しき、そのようなあでやかさはありませんでした。私が初めて少年文壇に出陣した時の心持は、これと変りがありませんでした。そしてその獲物も美事でありました。私の作は活字となつて本誌上に現れました。多くの友の視線を一身に集めて、手先の顫えを制えながら、初陣の獲物を開いた時の心持はどんなであつたでしょう。丁度その頃青島が陥落して、私の一番親しい叔父さんが、初陣の功を胸の勲章に表して、私の家を訪問しました。私も負けぬ気で、すぐと彼の賞牌を胸に飾りました。そして二人で、一日楽しく遊びました。その後私は毎月欠かさず投書を続けました。併しその結果はいつも没書でありました。私は無経験の初陣に当選したのに、慣れて没書になるのを不思議に思われませんでした。併しそれがもつともな事であると知りました。日頃鍛えた腕の程を示す晴の場所、不覚を取つては一生の名折れ——斯うした意気と緊張した心に、武士の初陣は充ち満ちています。これが失敗を防ぎ、功を立てるのではなくありますまいか。私の文壇の初陣も、これ程ではなくとも、確かに真面目であり、真剣でありましたが、慣れるに従つて選者の氣を覗つたり、文の飾にのみ腐心したり

等するようになったのです。これを痛切に感じた私は、再び初陣の心持にかえつて文壇に乗り出し、その後は連戦連勝、十箇月足らずして名誉牌を受くる身となりました。私は今後社会へ出てからも、常に初陣のような意気と緊張した心とを以て努力奮闘の生涯を送り、老衰し易い日本人の為に大いに氣を吐くつもりであります。

此の度の課題が、私の兼ねての考えに合ったことを喜びます。そうして私はこれを本誌文壇の最後の初陣（奇妙な言葉ですが）としてお別れいたします。（自作証明者父大宅八雄）

評 吾が少年文壇に折々花を咲かせていただいた大宅君の最後の初陣を祝する、功名手柄の勇ましい将来を祝する。<sup>31</sup>

『少年』から初めて少年賞牌が届いた時期と青島占領の時期が近いという記述からも、大宅が最初に『少年』への投稿で少年賞牌を手に入れたのは一九一四年一二月号だと特定できよう。

### 三 大宅壮一の投稿活動の意味

以上『少年』における大宅の投稿活動の全体像を明らか

にした。まず時期としては、従来の年譜では大宅の投稿活動の開始が一九一二年とされてきたが、大宅が「初めて作文を投稿して見事なメダルをもらった」と記憶している『少年』に限ると、一九一四年からであることがわかった。次に内容とりわけ作文のそれには、叙情的なもの・叙景的なもの・叙事的なものいづれも見ることができた。この投稿活動で、大宅がのちの評論・文芸活動（大宅は『日本の遺書』（ジープ社、一九五〇年）などの小説も書いている<sup>32</sup>）に結びつく文章力を培ったということが言える。

その文章力についてひとつの具体的な数値で確認してみたい。表は、茨木高校資料室に残されている過去の在籍者の成績データから大宅のものを抽出したものである（四年次に退学したため三年までのものが存在している。「進止」とは、進級・止級のことである。また順位は進止をあわせた人数のなかでのものである）。これを見ると三年間とも上位層に位置しているが、国語（とくに作文）と英語がいずれも九〇点台後半であることがわかる。作文の高得点は投稿活動と大きくかかわっている。

評論・文芸活動以外に大宅が従事した翻訳活動には、英語と作文の好成績が結びついている。たとえば大宅は新潮社の『世界文学全集』の第一六巻「モンテ・クリスト伯

表 茨木中学校時代の 大宅 壯一 の成績

		1917 年度 第三年級		1916 年度 第二年級		1915 年度 第一年級			
修身		93		95		100			
国語及 漢文	国語	95		国語	96		国語	98	
	漢文	93		漢文	90		作文	96	
	作文	98		作文	96		習字	96	
	習字	92		習字	91		平均	97	
平均	95		平均	93		英語	95		
英語	訳読	98		英語	96		歴史	91	
	書会作文	96		歴史	96		地理	92	
平均	97		地理	83		算術	95		
歴史	80		代数	84		博物	87		
地理	86		博物	93		図画	93		
数学	代数	78		図画	71		唱歌	72	
	幾何	80		唱歌	80		体操	88	
平均	79		体操	95		総平均	91		
博物	83		総平均	89					
図画	69								
唱歌	80								
体操	88								
総平均	85								
進止	進		進止	進		進止	進		
席次	67名中13位		席次	86名中8位		席次	92名中5位		
体格	中		体格	中		体格	強		
褒賞			褒賞			褒賞	勳		
欠課	全日	38		欠課	全日	0			
	部分	4			部分	1			
				入学前の学歴	出身校名	富田			
					修了年級	高二			

第二卷」(一九二八年)、第三三卷「英吉利及愛蘭戯曲集」(同)のなかの三作品の翻訳のほか、第三〇卷「椿姫・サフォ・死の勝利」(同)においても生田長江の「死の勝利」の改訳に協力している。生田は「大宅壮一氏の一方ならぬ御助力をまで煩わして」「平明極まる『大衆的』文体を試みました」<sup>33</sup>と述べている。

『日記』は義務として大宅なりに題材を取捨選択し熱心に書いたものと考えられるが、投稿作品は掲載されることを目的に自発的に書いたものである。評論を商品ととらえるのちの大宅の発想に近いのは後者であろうが、両方から中学生時代の大宅の文筆活動を把握していく必要がある。

中学生時代の大宅をめぐる今後の課題としては次の三点が挙げられる。第一に、年譜の検証という意味も含めて、投稿活動の全容をさらに解明していくことである。第二に、(本稿では触れなかったが)父や兄が放蕩し大宅自身が家業に従事しながら通学していた家庭環境に、検討を加えていくことである。第三に、このふたつのいわばミクロと、当時の社会状況というマクロとの関係から、大宅の「人間形成」を探ることである。そのことは、「マスコミの王様」の実像とその彼が受け入れられた戦後社会を知ることにつながる。

#### 【注】

- 1 大阪府立茨木高等学校校史編纂委員会編『茨木高校百年史』創立百周年記念事業実行委員会、一九九五年、八六六頁。以下の講演会にかんする記述は、八五六、八五七、八六五頁も参照。なお大宅は一九六〇年一月二三日にも講演をしている(同書、八六五頁)。
- 2 大宅壮一「炎は流れる——明治と昭和の谷間」第一巻、文藝春秋新社、一九六四年、三頁。
- 3 前掲『茨木高校百年史』、三三三頁。
- 4 大宅壮一全集編集実務委員会編『大宅壮一読本』蒼洋社、一九八二年、二四四頁。大隈秀夫「裸の大宅壮一——マスコミ帝王」三省堂、一九九六年、五九〇頁。
- 5 大宅壮一「わが珍商売往来——文化と商業主義の間——」『大宅壮一選集二』筑摩書房、一九六〇年、一五六頁(初出は一九五四年)。
- 6 『日記』上巻、一四頁。
- 7 『日記』下巻、一七頁。
- 8 『日記』下巻、二三頁。
- 9 「初陣」の反響は大きかったようである。「少年」一九一七年二月号に掲載された「初陣」の告知で示された投稿締切は二月五日であったが、三月号の「編集余話」では次のように述べられている。「諸君が日頃から渴望されて居ただけ、諸君の歓迎は非常なもので、『初陣』の原稿で昨今記者の机上は毎日山をなして居ります。／＼今日まで集ったので既に数千通に達して居りますから締切の五日

までには一万以上にも達する事とされています(村羊生『初陣』の盛観「同号、一四頁」。また四月号の「編集余話」によると、「初陣」は通常号と同じ部数を発行し予定通り三月一日に発売したが、地方からの注文が続出し、即日再版に着手したという。初版は即日本社売却となり、再版は四日に出来たもののその日のうちに売り切れたという(安部季雄『初陣』の重版「同号、一一二頁」)。

- 10 『日記』下巻、三八頁。
  - 11 『少年』一九二四年二月号(第一三五号)、一〇六頁。
  - 12 『少年』一九二四年一〇月号(第一三三号)、一九五頁。
  - 13 『少年』一九二五年八月号(第一四三号)、一二七頁。
  - 14 『少年』一九二五年二月号(第一四七号)、一二九頁。
  - 15 以上、『少年』一九二六年一月号(第一四八号)、一二五、一二六、一二七、一三四頁。
  - 16 『少年』一九二六年二月号(第一四九号)、一二八、一二九頁。
  - 17 『少年』一九二六年三月号(第一五〇号)、一二九頁。
  - 18 『少年』一九二六年四月号(第一五一号)、一二七頁。
  - 19 『少年』一九二六年六月号(第一五三号)、一二一頁。
  - 20 読売新聞大阪本社社会部『実記・百年の大阪』朋興社、一九八七年、六四二頁。同水泳場にかんしては、前掲『茨木高校百年史』、三四一―三四七頁も参照。
  - 21 以上、『少年』一九二六年七月号(第一五四号)、一二六、一二八頁。
  - 22 『日記』上巻、二九〇頁。
  - 23 『少年』一九二六年八月号(第一五五号)、一二三頁。
  - 24 『日記』上巻、三二〇、三二一頁。
  - 25 『日記』上巻、三四四頁。
  - 26 以上、『少年』一九二六年九月号(第一五六号)、一一九、一二七頁。
  - 27 『日記』上巻、三三五頁。
  - 28 『少年』一九二六年一月号(第一五八号)、一一四頁。『日記』上巻三三四―三三六頁。
  - 29 『少年』一九二七年二月号(第一六一号)、一三一頁。
  - 30 『少年』一九二七年三月五日臨時増刊号(第一六三号)、九一、九二頁。
  - 31 前掲『少年』臨時増刊号、一一〇、一一一頁。
  - 32 『日本の遺書』については、拙稿「大宅壮一の『再登場』——一九五〇年刊行の『日本の遺書』『人間裸像』に着眼して——」『出版研究』第四二号、二〇一二年、を参照されたい。
  - 33 生田長江「訳者から」『世界文学全集』第三〇巻、新潮社、一九二八年、一五頁。
- 付記・大阪府立茨木高等学校での調査にあたっては校長の岡崎守夫氏にご協力をいただいた。同校久敬会には写真の使用のご許諾をいただいた。大宅壮一の成績の公表については大宅映子氏にご許諾をいただいた。「死の勝利」の改訳については半藤一利氏にご教示をいただいた。『少年』の調査では主に大阪府立中央図書館国

際児童文学館を利用したほか、国立国会図書館・公益財団法人大宅壮一文庫でも閲覧をおこなった。同文庫の鴨志田浩氏・田中繁行氏には、大宅壮一の少年雑誌への投稿についてお話をうかがった。記して皆様に感謝申し上げます。なお資料の引用においては適宜、表記を改めている。本稿は、二〇一三年度科学研究費補助金（基盤研究C）ならびに同年度宮崎市学術研究振興助成金による研究成果の一部である。

（宮崎公立大学准教授）

## 投稿規程

- 一、投稿に資格制限はありません。
- 二、テーマは大衆文化に関するもの。
- 三、枚数は四〇〇字詰め原稿用紙換算で、二〇枚程度。
- 四、採否は編集委員会で決定します。
- 五、投稿は随時受け付けていますので、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター宛てにお送り下さい。  
なお原稿はお返ししません。